EDUWARD Press

2026年1月 VETERINARY BOARD 誌名リニューアル

臨床の選択肢を広げるケーススタディ・マガジン

獣医臨床カンファレンス

症例の「追体験」を誌面で

誌名リニューアルによせて

臨床の選択肢を広げるケーススタディ・マガジンとして多くの先生方にご愛読いただいてきた「VETERINARY BOARD」が2026年1月、「獣医臨床カンファレンス」として生まれ変わります。

新タイトルの通り、まるで各分野のエキスパートが集まる「カンファレンス」に参加しているかのような、上質の学びを味わい尽くせるのが本誌の大きな魅力の一つです。

毎号さまざまなテーマを深堀りし、バリエーション豊富な臨床像を症例報告形式でご紹介。エキスパートの先生方の診療メソッドを追体験するかのごとく、病態の理解を深めながら、検査結果の解釈から鑑別疾患、薬剤の選択基準など、診療力を高める＋αのポイントをとことん学ぶことができます。

実臨床に活かす知識を効率よく吸収し、臨床の選択肢を増やす一助として、ぜひ本誌をお役立ていただけますと幸いです。

1年定期購読：48,400円（税込）／毎月15日発行

単品：4,400円（税込）

お申込みはこちら➡

3 獣医臨床カンファレンス つのPOINT

POINT 1 エキスパートの診療メソッドを「症例から学べる」

POINT 2 POINT解説で知識を深堀りできる

POINT 3 3年間の連載プログラムで臨床力を効率よく強化

誌名リニューアル応援コメント

中村健介先生　（北海道大学）

VETERINARY BOARDには思い入れがありました。創刊号で巻頭特集を担当するという栄えある役割をいただいたこと、そのタイミングが私自身の異動と重なっていたということ、当時の担当編集長が面白かったことなど、さまざまな要因があります。その誌名が変わるというのは少々寂しさがありますが、今考えると「VETERINARY BOARD」、正直、少し意味が分かりにくいですよね。それが「獣医臨床カンファレンス」になるとのこと。今のところ愛着はまだ湧いていませんが、名と実がマッチする形になったと思います。すなわち、実は内容はすでに大幅リニューアルされていますが、私達が実際に経験した１例を通じて、その周辺にある情報を網羅して学んでいく、という本学の研修プログラムの中で行っているカンファレンスを擬似的に体験できるような構成であることをよく表しているのではないかと思います。読者のみなさんに愛される雑誌になるよう祈っております。

佐藤佳苗先生　（松原動物病院）

「獣医臨床カンファレンス」というタイトル、非常に面白そうです。カンファ、ラウンド、症例検討会、と呼び名はさまざまですが、症例について議論する場というのは非常によいと思います。

実際の臨床で知識が身につくと実感するのは、なんといっても実践、つまり症例のことを考えているときで、いざ症例を体験すると蓄えてきた知識が一気に腑に落ちる経験はみなさんあると思います。

本誌「獣医臨床カンファレンス」は、特集も連載も、症例を用いた知識の関連付けができるような構成です。連載「総合臨床医を育てる全科ラウンド」も、各分野のエキスパートたちにご助力いただき、症例に紐づけて病態も効率よく理解できるようなイラスト解説にも力を入れてもらっています。毎号、情報量がすごいことになっており、オトクな感じすらしてきます。病態を分かりやすく解説している書物には出会いづらいので、ぜひ臨床第一線の方のスキマ時間にでも、本誌を活用してみっちり情報を取り入れていただければ幸いです。

坂井 学先生（日本大学）

「獣医臨床カンファレンス」、いいじゃないか。率直に何を学ぶのか分かりやすい。診療の合間にコーヒーを飲みながら手に取りたくなる。

われわれ獣医師が診察する症例数は限られている。また、日々の診療の忙しさに症例をじっくり振り返る時間はそう多くない。動物の病気に真剣に向き合い、己で考えた診断、治療が正しいのか、誰も答えを教えてくれない。

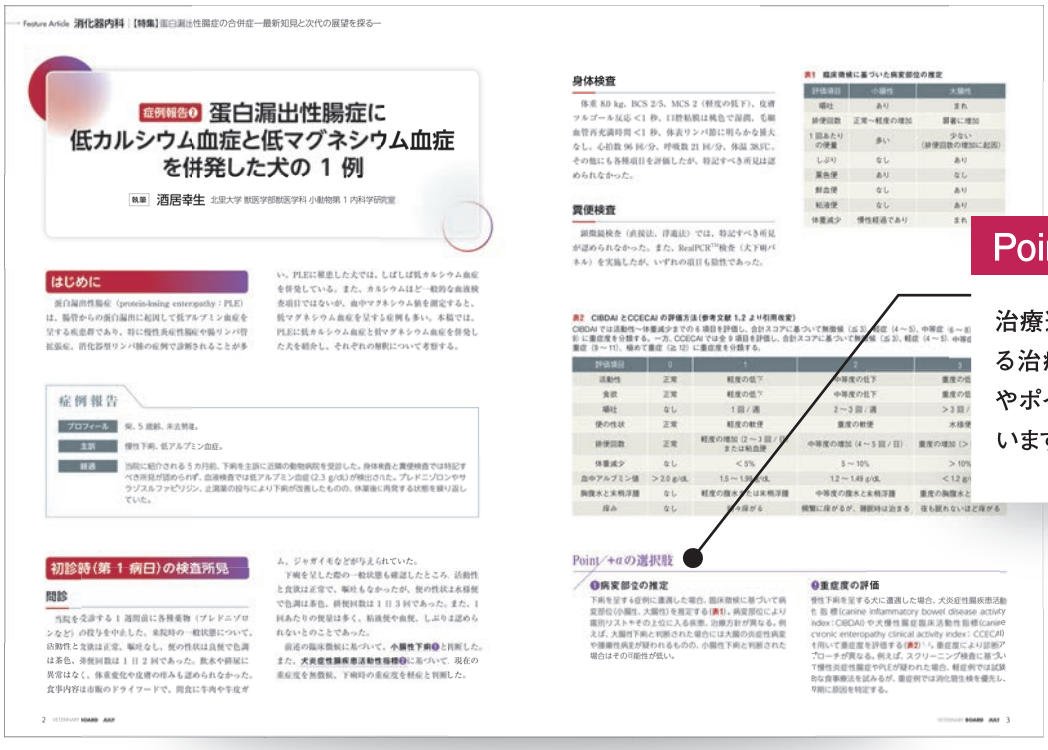
カンファレンスとは、そんな獣医師の不安や悩みを、経験豊かで専門性をもつエキスパートの先生に症例を提示し意見を交わすことで己の診療思考回路を再構築する、臨床でもっとも重要な場である。教科書や論文なども大事だが、実臨床から学べることは無限である。

毎号さまざまなテーマを深堀りし、あらゆる角度からエキスパートの診療メソッドを追体験する「獣医臨床カンファレンス」、みなさんも参加してみてはいかがだろうか？

2025年7月号から、特集もリニューアル!

特集では毎号さまざまなテーマを掲げ、症例報告形式でバリエーション豊富な臨床像を紹介。エキスパートの診療を症例から学びとり、臨床の選択肢を広げることができます。各症例報告では選択すべき検査とその評価方法、鑑別疾患、薬剤の選択基準など「診療力を高める＋αのポイント」を徹底解説。その症例に関するインフォームのポイントもQ&A形式で分かりやすくご紹介いただきます。

【症例報告】


Feature Article 消化器内科 | 【特集】蛋白漏出性腸症の合併症―最新知見と次代の展望を探る―

症例報告❷ 蛋白漏出性腸症に低カルシウム血症と低マグネシウム血症を併発した犬の 1 例

酒居幸生 北里大学 獣医学部獣医学科 小動物第 1 内科学研究室

はじめに

症例報告

初診時（第 1 病日）の検査所見

問診

身体検査

糞便検査

Point＋αの選択肢

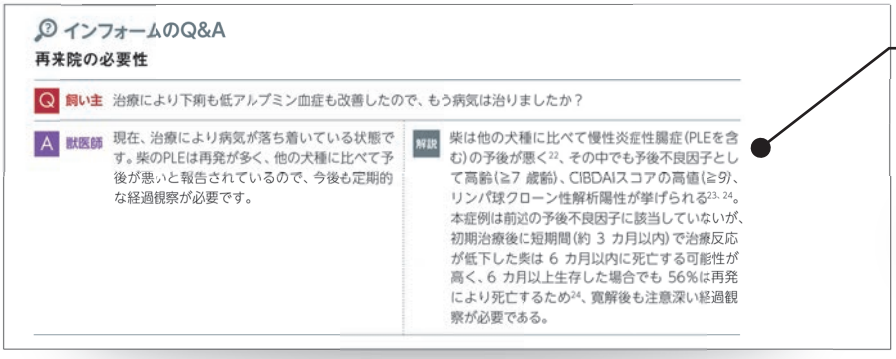
❶病変部位の推定

❷重症度の評価

Point＋αの選択肢

治療選択肢、再発･難治症例に対する治療法のほか、検査の判断基準やポイントなどが理解しやすくなっています。

新設コーナー【インフォームのQ&A】


インフォームのQ&A

再来院の必要性

Q 飼い主 治療により下痢も低アルブミン血症も改善したので、もう病気は治りましたか？

A 獣医師 現在、治療により病気が落ち着いている状態です。柴のPLEは再発が多く、他の犬種に比べて予後が悪いと報告されているので、今後も定期的な経過観察が必要です。

解説 柴は他の犬種に比べて慢性炎症性腸症（PLEを含む）の予後が悪く[22]、その中でも予後不良因子として高齢（≧7 歳齢）、CIBDAIスコアの高値（≧9）、リンパ球クローン性解析陽性が挙げられる[23, 24]。本症例は前述の予後不良因子に該当していないが、初期治療後に短期間（約 3 カ月以内）で治療反応が低下した柴は 6 カ月以内に死亡する可能性が高く、6 カ月以上生存した場合でも 56％は再発により死亡するため[24]、寛解後も注意深い経過観察が必要である。

インフォームと その根拠が理解できる！

インフォームのポイント、よくある飼い主からの質問に対する対応を、Q&Aと解説でしっかり学べます。

直近の特集スケジュール

※タイトルは仮題のため、変更の可能性があります。あらかじめご容赦ください。

2025年10月号
「進行した僧帽弁閉鎖不全症に適応する外科的治療」
監修:森 拓也（近畿動物医療センター）

2025年11月号
「教科書通りにいかない猫の肝胆道系疾患と黄疸」
監修:坂井 学（日本大学）

2025年12月号
「知らなければ救えない　ウサギのエマージェンシー」
監修:田向健一（田園調布動物病院）

2026年1月号
「慢性腎臓病の最前線! コントロールしにくい症例群」
監修:宮川優一（日本獣医生命科学大学）

2026年2月号
「併発症例を極める! 悩ましい内分泌疾患の管理」
監修:大森啓太郎（東京農工大学）

2026年3月号
「神経科×眼科　視覚障害･眼徴候の鑑別を攻略する」
監修:未定

2025年7月号から**新連載スタート！**

総合臨床医を育てる全科ラウンド

2025年7月にスタートした新連載「総合臨床医を育てる全科ラウンド」では、**全3年間の教育プログラムとして、主要8科目/合計約140症例（疾患）**をラインアップしました。各疾患の病態をイラストを交えて詳細に解説した上で、症例報告と豊富な解説を通じて「知識/経験の引き出し」を増やすことができる構成となっています。

「病態」を理解し、知識のベースを磨き上げる

病態イラスト

細部にわたる詳細なイラストで、病態を徹底的に理解できる！

「症例報告」から学び、実臨床に活かす

POINT 解説（症例報告）

「もし、〇〇だったら…」など、関連情報で別パターンの症例に遭遇した場合の知識も強化！

BOX 解説

図解や表を交えて、診断・治療の根拠を深く理解できる！

総監修者からのメッセージ

「総合臨床医を育てる全科ラウンド」が熱い

臨床をある程度経験すれば典型例では悩まなくなりますが、非典型例や複雑な症例に難しさを感じることは少なくありません。その差は、「なぜその病態に至ったのか」を理解できているかどうかにあります。本連載「総合臨床医を育てる全科ラウンド」では、分かりやすいイラストで「病態生理」を整理し、症例報告とPOINT・BOXを通じて効率よく実践的に知識を吸収してもらうことができます。忙しい中でもレベルアップしたい臨床医の方々におすすめの連載です。

総監修
佐藤佳苗先生より
松原動物病院
米国獣医内科学専門医（小動物内科）

連載「総合臨床医を育てる全科ラウンド」

主要8科目・140症例以上を学べる、3年間の教育プログラム

腎泌尿器 監修：佐藤佳苗先生（松原動物病院）

KIDNEY
腎臓

①腎臓の疾患
- 慢性腎臓病（CKD）ステージ 1、2
- CKD ステージ 3、4
- 急性腎障害（AKI）
- 腎盂腎炎

②腎臓～尿管の疾患
- 近位尿細管性アシドーシス（ファンコーニ症候群）
- 遠位尿細管性アシドーシス
- 糸球体腎炎
- 尿崩症·SIADH

③膀胱～尿道の疾患
- 尿道括約筋機能不全
- 反射性協調障害
- 尿路上皮癌
- 猫の特発性膀胱炎（FIC）

④尿管～膀胱の疾患
- 尿管閉塞
- 細菌性膀胱炎
- 上部尿路の尿石症
- 下部尿路の尿石症

⑤全身性高血圧
- 全身性高血圧症（TOD）の概論
- TOD（循環器）
- TOD（眼科）
- TOD（神経）

循環器·脈絡系 監修：中村健介先生（北海道大学）上田 悠先生（ノースカロライナ州立大学）

HEART
循環器

①うっ血性心不全(CHF)
- CHF全体の病態の解説
- 粘液腫様変性性僧帽弁疾患（MMVD）
- 肥大型心筋症（HCM）

②肺高血圧症
- 1群の肺高血圧症、肺高血圧症全体の概説
- 2群の肺高血圧症
- 3群の肺高血圧症
- 4群の肺高血圧症

③不整脈
- 房室ブロック
- 心房細動、心房粗動
- 心室頻拍、促進性心室性固有調律
- 洞停止

④先天性心疾患
- 動脈管開存症（PDA）
- アイゼンメンジャー症候群
- 心室中隔欠損（VSD）
- 肺動脈弁狭窄症（PS）

⑤血栓症
- 動脈血栓症
- 静脈血栓症
- 門脈血栓症
- 凝固亢進状態（hypercoagulability）

消化器 監修：横山 望先生（北海道大学）

DIGESTIVE
消化器

①口～食道
- 嚥下造影検査
- aerodigestive disorders
- 輪状咽頭アカラシア vs 咽頭機能不全
- 巨大食道症 vs 食道アカラシア様症候群

②胃～小腸·腹腔
- 胃潰瘍
- 肉芽腫性リンパ管炎
- 腸陰窩病変（crypt disease）
- 猫の好酸球性硬化性線維増殖症

③大腸・関連手技
- 肉芽腫性結腸炎
- 炎症性結直腸ポリープ
- 糞便マイクロバイオーム移植
- 大腸のリンパ腫

④肝胆膵1
- 先天性胆道疾患
- 門脈体循環シャント
- 胆嚢炎
- 犬の慢性肝炎

⑤肝胆膵2
- 犬の急性膵炎
- 猫の三臓器炎
- 肝臓の空胞変性

神経 監修：中本裕也先生（ Neuro Vets 動物神経科クリニック）

NEURON
神経

①神経学的検査(前編)
- 病変の位置決め

②神経学的検査(後編)
- 実例で学ぶ結果の解釈

③神経筋接合部～筋疾患、末梢神経障害
- 総論
- 重症筋無力症
- 咀嚼筋筋炎
- 急性多発性神経節炎

④脳脊髄炎·脳神経障害
- てんかん
- 脳脊髄炎
- 脳腫瘍
- 蓄積病（ライソゾーム病）

⑤脊髄疾患
- 環軸椎不安定症
- 椎間板ヘルニア
- 脊髄腫瘍
- 脊髄空洞症（知覚過敏、感覚障害）

皮膚 監修：今井昭宏先生（JASMINEどうぶつ総合医療センター）

DERMA
皮膚

①アレルギー性皮膚疾患
- 猫のアトピー様皮膚症候群
- 犬のアトピー性皮膚炎
- 犬の食物アレルギー

②免疫介在性皮膚疾患
- 天疱瘡
- 脂肪織炎
- 脂肪織炎、DLE(discoid lupus)、SLE(systemic lupus)
- 中毒性皮膚壊死症

③感染性・腫瘍性皮膚疾患
- 膿皮症
- 皮膚糸状菌症
- マラセチア性皮膚炎
- 皮膚型リンパ腫

④皮膚生検の使いどころ
- 皮膚生検の概論
- 特徴的な肉眼病変があり皮膚生検を行った症例
- 違和感があり皮膚生検を行った症例
- 皮膚生検が特に推奨される肉眼病

内分泌 監修：佐藤雅彦先生（どうぶつの総合病院 専門医療＆救急センター）

ENDOCRINE
内分泌

①糖尿病
- 犬の糖尿病
- 猫の糖尿病
- 糖尿病性ケトアシドーシス(DKA)、高浸透圧高血糖症候群（HHS）、正常血糖糖尿病性ケトアシドーシス（eDKA）

②甲状腺·副甲状腺
- 犬の甲状腺機能低下症
- 猫の甲状腺機能亢進症
- 副甲状腺機能更新症
- 副甲状腺機能低下症

③副腎
- 犬の副腎皮質機能亢進症
- 猫の抗アルドステロン血症
- 犬の副腎腫瘍（偶発種）・褐色細胞腫
- 犬の副腎皮質機能低下症

④その他代謝·内分泌疾患
- インスリノーマ
- 尿崩症
- 犬の高脂血症
- 抗利尿ホルモン不適合分泌症候群（SIADH）

血液 監修：森下啓太郎先生（北海道大学）

BLOOD
血液

①免疫介在性血液疾患
- 免疫介在性溶血性貧血（IMHA）
- 非再生性免疫介在性貧血（NRIMA）/前駆細胞標的免疫介在性貧血（PIMA）
- 免疫抑制薬による治療

②血球減少症を呈する感染性疾患

A：犬バベシア症
B：猫ヘモプラズマ症、SFTS、その他

③止血異常
- 一次止血の異常
- 二次止血の異常
- 免疫介在性血小板減少症（ITP）
- hyperfibrinolysis（線溶系の機能亢進による遅発性出血）

④骨髄生検
- 骨髄生検の適応と手技
- 採取後の扱い

呼吸器 監修：藤原亜紀先生（日本獣医生命科学大学）

LUNGS
呼吸器

①基本と鼻
- 呼吸様式から病変の位置決め
- 鼻腔内腫瘍（犬・猫）
- 特発性鼻炎（非感染性鼻炎）
- 真菌性鼻炎·副鼻腔炎

②上部気道
- 鼻咽頭狭窄・鼻咽頭虚脱
- 喉頭腫瘤（腫瘍と炎症）
- 短頭種気道症候群（BAS）
- 喉頭麻痺

③下部気道·肺1
- 気管気管支軟化症
- 慢性気管支炎、猫喘息
- 肺の寄生虫症（犬・猫）
- 肺腫瘍

④肺2·胸膜腔
- 非心原性肺水腫、急性呼吸窮迫症候群（ARDS）
- 感染性肺炎
- 間質性肺疾患
- 胸腔内疾患（胸水、膿胸、気胸など）

※内容は変更する可能性がございます。あらかじめご容赦ください。